

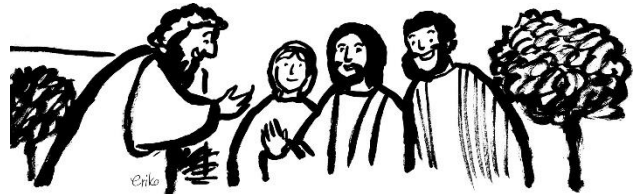
## 説教抄

十 私達の父なる神と主イエス・キリストから恵みと平安とが、  
皆様お一人お一人の上にありますように。アーメン

今日の日課は不思議なことに、五千人の供食の出来事がすっぱり抜けています。しかし、ここから聞こえて来るのは、飼い主のいない羊のような群衆を深く憐れむ主イエスのお姿です。それは旧約のエレミヤ、讚美頌の詩編 23 をも重ね合わせるとよりハッキリ見えてきます。

私たちは五千人の人が満腹した出来事をパンと魚が増えた奇跡だと思ってしまいます。しかし、聖書にはパンが増えたとは一言も書いていないのです。なぜか？ それはこの物語のポイントがパンが増えたことではないからです。大切なのは主イエスが、飼い主のいない羊のような群衆をご覧になり、深く憐れまれたということだからです。「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる。」この詩編 23 に歌われた出来事が今ここに実現しているということなのです。それでも、パンの奇跡はどうなるの？ 心配はありません。なんと来週から 5 週間に亘ってヨハネ 6 章を通してじっくり学ぶことになるからです。

今日の福音は、最初の伝道旅行から弟子たちが戻ってきた場面から始まります。二人一組で宣教の旅に派遣された弟子たちは、イエス様の許に帰り、それぞれ自分たちが体験した福音宣教の成功や失敗の数々を報告しました。



杖一本だけ持つことが許された厳しい旅。しかし、その苦労とともに今迄経験したことがない大きな喜びにも出会ったに違いない。弟子たちは、福音宣教が神の御業であることを体験したはずです。福音宣教の使命に生きていくということは、このような喜びや失意の体験を繰り返していくことだと言えます。主イエスはそんな弟子たち一人一人に慈しみと労いの眼差しを注ぎながら、彼らの成功も失敗もすべてを温かく包み込んで、祝福して下さったと思います。

主イエスは、「わたしの父は今もなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ。」（ヨハネ 5:17）と仰る。主イエスも御父も「働かれる神」です。だから、「私に従いなさい」という主イエスの言葉には、「私と一緒に働いてほしい」という願いが込められているのです。主イエスと一緒に働くということ、それは具体的な宣教活動ということだけではありません。むしろ日常の生活の中で神様への愛に生きること、隣人への愛に生きることこそが大切だからです。ホイヴェルス神父の「最上のわざ」という詩にあるように、年をとって体を動かすことができなくなっても、そのありのままの自分で神様への賛美と感謝を捧げ、誰かのために祈り続けること、そういったことすべてが主イエスと共にあることだからです。

弟子たちの報告を聞いた後、イエス様は優しく仰る。「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」。ここにいたら休めないのです。出入りする人が多くて休む暇もない。そこで、この弟子たちは船に乗り、人里離れた所に向かいます。「人里離れた所」、これは「荒れ野」という言葉です。「荒れ野」、そこは主イエスが度々祈りの場とされたところです。イエス様は祈りに行こうと仰った。祈りの中でこそ本当に休むことが出来る。「さあ、あなた方だけで、暫く祈りに行っておいで。そして、そこでゆっくり休んで

おいで。神様の御前で憩いを得ておいで。」

そこで、弟子たちが船に乗って出かけ始めますと、それを目撃した群衆達が岸沿いに続々と移動し始める。この荒れ野で、人里離れた所で、祈りの場でようやくひと休みできると思っていたらば、そこにも大勢の群衆が待ち受けている。やっと神様の前で休める。イエス様と一緒に休める。そう思っていたら、待っていたのは大勢の群衆達です…。「もう止してくれ、勘弁してくれ。」この時の弟子たちの気持ちが分かるような気がします。

ところが、これらの群衆を見て主イエスはどうされたのか。34節です。「イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた。」

この「深く憐れみ」という文字は大切な言葉です。元のギリシア語スプラUNKニゾマイには「腸（内蔵）」という言葉が隠されています。大勢の群衆を見て弟子たちは、「もう止してくれ、勘弁してくれ」と思ったかもしれませんが、主イエスの方は「腸が突き動かされた」というのです。内臓がちぎれそうに痛くなった。頭だけで「かわいそうに」という同情レベルではないのです。むしろ沖縄の「ちむぐりさ（肝苦りさ）」が表している共に感じ共に苦しむ「共感共苦」の状態、断腸の思いです。



スプラUNKニゾマイ「腸が突き動かされるほどに深く憐れむ」というギリシア語は、ギリシア人の作った言葉ではなく、各地に離散しギリシア語を使うようになっていたユダヤ人たちによって作られた言葉なのです。心と体を別物と考える二元論的思考のギリシア人からはこんな言葉は生まれなかったでしょう。一方、日本人は「からだことば」が豊富なことから分かるように、心身一如的思想です。旧約聖書の民ユダヤ人たちにとっても「内臓」は深い感情が宿っているところと考えられていました。ですからヘブライ語で「深い憐れみ」を示すラハミームという言葉は、「内臓」や「子宮（胎）」を示すレヘムという言葉から来ているのです。「腸（内臓）が振れるほどでなければ、本当に憐れんでいるとはいえない」というのが聖書の民の体験の根底にあったということでしょう。

「深く憐れみ」という言葉、これは福音書では主イエスの心を表すときにしか用いない特別な言葉です。例外は「善きサマリア人の譬え」です。追い剥ぎに襲われ半殺しになって倒れている人の傍に立って、このサマリア人は「憐れに思った」とあります。そこから、このサマリア人は主イエスご自身だという解釈が生まれてきました。本当に倒れている人、苦しんでいる人の前で足を止めて、その痛みを御自分の痛みとしてお感じになることが出来るのは主イエス以外にはないからです。

そこにはまた深い悔い改めがあります。私たちは本当の意味で、他人の痛みを自分の痛みとすることが出来ない存在だということです。他人の痛みを目の前にいたしましても、弟子たちのように「もう勘弁してくれ」と言いたくなるのです。しかし、真の牧者である主イエス・キリストはたとえ「死の陰の谷を行くときも、共にいて下さる」ただ一人のインマヌエルのお方なのです。

十 人知ではとうてい測り知ることの出来ない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守るように。アーメン